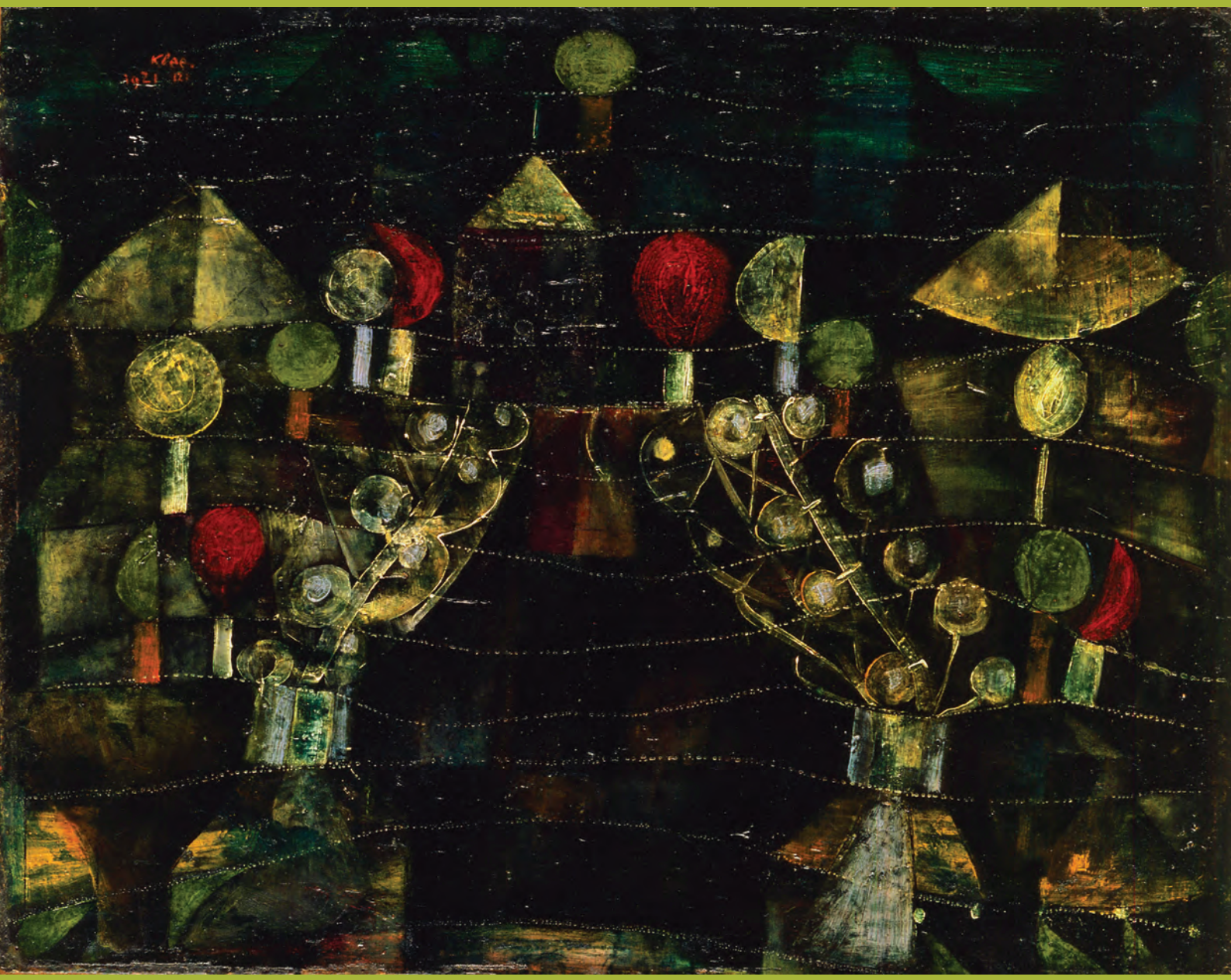
AICHI PREFECTURAL MUSEUM OF ART

MEMBERSHIP

愛知県美術館友の会・会報　第34号

空中回廊

この企画展は「不思議」の世界[三館協同企画展]／会員のひろば／講座ダイジェスト[アメリカの美術][ゴシックの大聖堂]／愛知県美術館より／愛知県美術館コレクションから[パウル・クレー《女の館》]／友の会活動紹介



パウル・クレー《女の館》1921年

○この企画展は「不思議」の世界○

魔術／美術 幻視の技術と内なる異界 ―三館協同企画展―

2012年4月13日(金) から 6月24日(日) まで開催

通常とは異なる、自由な切り口で愛知・岐阜・三重、三県立美術館の所蔵品が展示される三館協同企画展。2007年「20世紀美術の森」以来４年ぶりの、愛知県美術館における開催です。

魔術について

魔術という言葉の響きから連想するものは何でしょう。おどろおどろしさ、妖しさ、言葉では表せないが肌が感じる何か、不思議なことをまき起こす術…。「魔術」そのものが、定義付けの難しい言葉ですが、テーマごとに展示された作品に触れることにより、表現するという行為そのものに潜む魔術をも感じとっていただけることでしょう。

三つのテーマ

田中訥言《雪月花図》
19世紀前半 愛知県美術館

第一章では、人工的に知覚を操作するような作品を展示します。科学的な理解が深まる前は、表現上の技法、技術として考えられるものも、一種の「魔術」のような脅威的なものとしてとらえられていたのです。遠近法のような、今では一般的な技法にも、魔術のようなイメージがしばしば重ねられたのでした。

また、田中訥言の《雪月花図》は、本紙部分だけではなく、本紙を支える表具部分にも筆が加えられた描き表具。「雪」「月」「花」がどの部分に当たるのか、会場で確かめてみてください。このように、この章では観るひとを驚かせ、謎かけをする造形上の技術に焦点があてられています。

第二章では、画家たちの現実を越える想像力に注目しています。身近な生活の中にも、昔から伝わる魔術的な想像力を見つけることができます。例えば狛犬は神様のいる世界との境界線を示し、お面は非日常を招き入れるツールとして活用されました。これら眼に見えない世界を表現しようとしたものが、時代や地域を越えて紹介されます。狛犬や日本のお面と、オディロン・ルドンなど19世紀ヨーロッパの版画が同室に並ぶなど、普段よく行く「○○展」ではお目にかかれないような展示や会場の雰囲気を愉しむことができます。

不思議な世界は地方だけでなく、都市にも存在しました。19世紀から発達した近代都市に出現した、それまでの生活にない、きらきら瞬く灯りやショーウインドウ。初めて見た人にとっての都会は、それだけでも夢の世界といえるかもしれません。また都会に住む人たちにとっては、閉ざされた空

オディロン･ルドン〈夢のなかで〉より《Ⅷ.幻視》
1879年 岐阜県美術館

《寝ぐせ》2003年

《ベサメ・ムーチョ》2003年

《地蔵》2004年

《クマ》2001年

中澤英明「子供の顔」シリーズ 愛知県美術館

間のなかで繰り広げられるサーカスも、非日常の世界だったのです。

第三章では、現代の芸術家の中にも見てとれる魔術的思考にフォーカスします。1980年代以降、神話などに着想を得た作品が再び数多く生まれました。アンゼルム・キーファーをはじめ、現代の作家の中にも預言者や神秘主義者の面影が感じられる者も多くいます。

また、親しみやすい身近な存在の中に一種のズレを見出すことも少なくはありません。中澤英明の描く子ども達は一見したところとても可愛らしいのに、どこか虚ろで不気味な印象も与えます。大人の持っている社会ルールにしばられない子ども達は、時に日常のズレを私たちに見せてくれるのです。

この展覧会はひとりの芸術家や、特定の美術分野に焦点をあてたものではありません。だからこそ、今までにない組み合わせによって美術の愉しみ方のみならず、ものごとのみかたや考え方にも

イケムラレイコ《birdgirl》2006年 三重県立美術館

新たな視点を加えることができるでしょう。中村学芸員のお話を伺い、感動したり共感したときに感じるあの「ぐぐっと脳が動く」感覚を、早く会場でたくさん味わいたい、と思いました。

（松下智子）

※この記事は本展覧会を担当される中村学芸員へのインタビューを参考に構成しました。

次回展覧会　7月13日(金)〜9月9日(日)

マックス・エルンスト―フィギュア×スケープ

次回企画展は、当館でも《ポーランドの騎士》でおなじみのマックス・エルンストの個展。これまでエルンストは、シュルレアリスムの画家の代表格で、多彩な技法を駆使した作家として語られてきました。勿論それは間違いではありませんが、この展覧会ではシュルレアリスムという枠組みから離れて、エルンスト独自の作品世界を捉えなおそうとするものです。彼の作品にはキャラクターとでも呼びたくなるような魅力的な人物、動物や怪物たちが繰り返し登場します。そして、彼らはその背景としている画面の地の表現と不可分なものとして存在しています。このような像と背景との関係を、この展覧会ではサブタイトルにもある「フィギュア×スケープ（像景）」という造語で呼びます。ドイツ、フランス、アメリカを渡り歩いたエルンストの制作活動は、まさにこの像景の採掘とでも言うべきものでした。是非この機会にエルンストのフィギュアたちに会いに来てください！（学芸員 副田一穂）

マックス・エルンスト《子供のミネルヴァ》1956年 油彩、カンヴァス、129.5×89.0cm、横浜美術館 ©ADAGP,Paris & SPDA,Tokyo,2012

○会員のひろば○

友の会特別鑑賞会『ポロック展』にて

◎特別鑑賞会「ポロック展」にて

昨年11月17日にポロック展特別鑑賞会が開かれ、昼・夜合わせて60人以上の会員と多数の学芸員さんが参加されました。

大島学芸員が撮った現地の写真を見ながらポロックの生い立ちや作品の成り立ちを聞き、芸術文化センターの総力をあげて、東京ではなく名古屋から始める展覧会であるという意気込みを感じました。会場では大島学芸員の詳しい解説に加えて村田館長や副田学芸員から、多角的な視点での解説もありました。

原寸大で再現されたポロックのアトリエについて話を聞く

参加されたみなさんからの感想…

◆ポロックの作品は、今まで画集の中でしか観たことがありませんでした。しかし、今回実際の作品を鑑賞し、その迫力に私は圧倒されました。具体的なモチーフは発見できませんが、その大きな画面に叩き付けられた力強い色彩から、作者の気迫が十二分に私に伝わってきました。

絵を描き手と描かれる側に分けて考えず、絵と自分がもっと身近なギブ・アンド・テイクの関係だと考えたポロック。その結果、考案されたポーリングという手法で、果たして彼はピカソを超えられたのでしょうか。これは今後も私の課題です。（高橋文枝）

そっくりに再現されたアトリエの床に上がってみると「絵の中に入って描く」というポロックの心情にふれたような気がしました。一見派手な動きに見えるが、実は計算された丁寧な作業でオールオーバーの画面ができていること、線と線の間から見える空間にも繊細な美しさがあることなど、鑑賞のポイントも伺いました。また、遺品展示や作品「カットアウト」の切り抜いた部分についての裏話なども聞き、貴重な展覧会をひと味加えて見ることができました。

（小林克敏）

展示室でもスライドでも熱心に解説される大島学芸員

◆「インディアンレッドの地」や「NO.7」を目の前にして圧倒されました。幾重にも重なってちらばった色、色、色。力強いリズムで迫ってくるような自由気儘な色の帯。その夥しさが、選ばれている色のせいか、心地よくさえ感じました。一見、無作為に絵具を滴らせたように見えるポーリングも、実は、ポロックの中でつきつめられていると聞いて、それだからこそ作品なのだとあらためて思いました。（K.けいこ）

○講座ダイジェスト○

友の会講座『アメリカの美術』塩津青夏学芸員
友の会講座『ゴシックの大聖堂』大同大学教授 佐藤達生氏

友の会講座『アメリカの美術―ポロック以前、ポロック以降』塩津青夏学芸員

11月26日にポロック展にちなんだ講座が開催され、アメリカ美術の歴史に触れることで、新鮮な感動を味わうことができました。

始めに、『美術家たちは、ヨーロッパの高度な文化に対する忠節と、まぎれもなくアメリカ的な様式を創り出そうとする願望との間で、ずたずたに引き裂かれ続けていた。この葛藤を解決しようとする努力が20世紀のアメリカ美術の歴史である。』という批評家バーバラ・ローズの言葉の紹介がありました。当時、ヨーロッパに遅れをとっていると評価されていたアメリカ美術ですが、ポロックが出現したことで大きく変わっていきました。

ポロックの解説のあと、「ポロック以降」と言われる、アメリカ美術界の紹介がありました。モーリス・ルイスの作品のように画面に絵の具が染み込むような技法がポロックの影響なのだと思うと、新しい見方ができて面白いと感じました。

現代美術とポロックとの関連を語る塩津学芸員

こうしてポロックの存在を通してみるとピカソの作品も今までと違って見えてきたように、愛知県美術館の所蔵作品もさらに魅力的にみえてくるにちがいないと思いました。(大矢真美代)

友の会講座『ゴシックの大聖堂：比類なき建築空間をめざして』大同大学教授 佐藤達生氏

多くの教会建築の画像をもとに解説する佐藤教授

2月12日、友の会講座初、建築に関する講座が開かれました。講師は大同大学工学部の佐藤達生教授です。

ランス大聖堂やアミアン大聖堂といった、ゴシック建築が登場した背景とその建築が目指したものを、西洋建築の流れをふまえて講演してくださいました。

ロマネスクやゴシックの中世建築は、「囲うこと」を造形表現の基本とする建築です。ギリシアやローマの、柱が主役の「支える」建築とは異なります。何故なら中世建築の主役は教会堂であり、キリスト教徒にとって教会堂は、「神の国」へとつながる聖なる領域の祭壇を「囲う」建築だからです。従って教会堂の外観は、理想の内部空間を追求した結果として形成された造形でしかありません。

「神の国」を表現する要素は光輝性と天上性です。中にいる人間が天上の光を浴びているかのように感じるステンドグラスの輝きと、光がもつ意味。重力を感じさせず上空に浮かんでいるような感覚を生む、ゴシックの薄い壁をさらに薄く見せる工夫。これらを実現するための技術も詳しく解説してくださいました。

職人たちの遊び心が詰まったガーゴイルを紹介していただきながら、ただ「綺麗」「圧倒される」以外にこんなにも沢山の見どころがあるゴシック建築を、実際に観たいと思いました。

(松下智子)

○愛知県美術館より○

棟方志功展 顛末記

◇棟方志功展 顛末記　愛知県美術館長 村田眞宏

昨年、プーシキン美術館展が東日本大震災の影響で中止になり、その代替で棟方志功展を開催したことはご存知のとおりです。震災発生時点では、プーシキン美術館展は横浜美術館での4月開催に向けて準備は最終段階になっていました。例えば、図録はもう印刷するだけでした。しかし、いよいよ日本への作品を輸送するという段階になってストップがかかり、その後、事態はどんどん深刻になっていきました。

プーシキン美術館展は中止せざるを得ないということがはっきりとした5月になって、棟方志功展開催の可能性があるという情報がもたらされました。偶然、この展覧会は震災以前に観る機会があり、その充実した内容に「将来、このレベルの棟方志功展を愛知県美で開催したい」と思っていたこともあり、ぜひ実現したいものでした。

一方、開催するなら、すぐにもポスターやチケットの印刷、前売りの手配なども始めなければならない状況でした。時間のないなかで、迅速に作業にあたることができる担当学芸員を決める必要がありました。私は、プーシキン美術館展を担当していた森学芸員と副田学芸員に、新人の平井学芸員を指名しました。数年前から準備してきた展覧会が直前に中止になってしまい、まだ気持ちの整理もついてないところで、専門も異なる展覧会を担当するというのは、本人たちにとって大変迷惑だったに違いありません。はじめのうちは戸惑っていたようでしたが、やがて気持ちを切り替えて、調査に出かけたり、大急ぎでポスターなどの準備に取り掛かったりと、積極的に取り組んでくれました。

棟方志功展の展示準備風景

事務担当スタッフを含め、彼らの努力のおかげで、あのすばらしい会場を作り、多くの皆さんに棟方志功の世界を存分に楽しんでいただくことができ、美術館にとって忘れられない展覧会になりました。

棟方志功展の友の会特別鑑賞会風景

○愛知県美術館コレクションから―深く知ると、もっとみえてくる○

パウル・クレー《女の館》

（編）ここでご紹介する所蔵作品《女の館》を、本会報表紙に掲載しました。

愛知県美術館の展示室の常連とも言えるこの作品は、友の会の皆さんにはもうお馴染みの一点となっていることでしょう。色とりどりの丸、三角、四角がリズミカルに組み合わされた愛らしい画面は、こどもの絵本に登場するようなおとぎの国のお城を思わせます。中央に開かれたカーテン（緞帳）によって舞台を連想する人もいるでしょう。（私には、背景の深い緑と赤や黄色の円の組み合わせは、夜の街に輝くクリスマスのイルミネーションのようにも見えます。）しかし、きっとこの絵を見る誰もが気になるのは、中央のカーテンの奥がぽっかり空いた暗闇になっている点ではないでしょうか。

《女の館》1921年 愛知県美術館

作品のタイトルが気づかせてくれるように、一見楽しげな雰囲気を持つこの作品は、実は、クレーによる女性の表象そのものです。タイトルを素直に理解するならば、一歩足を踏み入れると放蕩の生活へと引きずり込まれそうな娼婦の館がイメージされます。しかし、この暗闇は、より直接的に、女性の体内への入口を示しているとも言えます。実際、クレーは、記号や象徴を用いて直接的に性を表現した作品をいくつも制作しています（参考図版）。さらに、エロス（愛）とタナトス（死）を表裏一体のものと考えたフロイトに従えば、クレーがこの暗闇に見たのは死への恐怖でもあったと言えます。そうすると、繰り返し重ねることによって生み出された背景の黒々とした緑色も、この絵の暗い意味を強調しているように見えてきます。晩年の病が彼に現実的な死を予期させる以前から、「死」はクレーの絵画の重要なテーマの一つでした。

制度としての美術が誕生して以来、その制度は男性中心的に形成され、男性の視線を通して表現された世界がその本流を成してきました。そこでは、男性にとって他者である女性は憧れの対象であるばかりでなく、しばしば死をも思わせる恐怖の対象として表現されました。19世紀末に現れた「ファム・ファタル（男性を誘惑してその運命を変える悪女）」という女性の表象は、その典型です。本作を見ると、クレーのような20世紀の理知的な絵画にもその表出が見られることが分かります。愛知県美術館では4月から「魔術／美術」と題した企画展を開催しますが、ここでは本作のように、美術における想像力が生み出した女性の表現を紹介するコーナーも設けます。美しく見える作品の裏の顔にフォーカスする「魔術／美術」展で、本作を見直してみてはいかがでしょうか

《エロス》1923年 ローゼンガルト・コレクション

（学芸員　中西園子）

■学芸員の横顔

中西園子（なかにし・そのこ）
愛知県美術館学芸員。
滋賀県近江八幡市出身。学芸員になってもうすぐ1年。ポロック展という嵐が過ぎ、心穏やかに魔術展の準備に臨んでいます。

AICHI PREFECTURAL MUSEUM OF ART

MEMBERSHIP

■美術館から

今年度は、開館20周年と銘打った展覧会5本を開催します。今号で紹介されている「魔術／美術」と「エルンスト」の２本では、超自然的なイメージの作品を取り上げますが、秋開催の3本目のテーマは「美しき日本の自然」。当館と愛知県陶磁資料館のコレクションにより、日本の美術や工芸の分野で古来作家たちがどのように自然を表現し図様化してきたのかをご覧頂きます。

クリムトの生誕150年でもある今年12月から来年2月にかけての「ウィーン1903年　クリムト『黄金の騎士』をめぐる物語」では、当館を代表するクリムトの作品を核に、ウィーン分離派とウィーン工房、ジャポニスムなど様々な影響関係を検証します。

最後は私と平井学芸員が担当の「応挙」。写生的画風で知られる応挙を、西洋銅版画や中国絵画からの写実技法学習や、トリックアートにも通じるリアルな視覚効果の追求など多角的にご紹介します。障壁画の空間再現展示も見どころです。　（深山孝彰）

■友の会活動紹介

「島田章三展」
9月　特別鑑賞会(昼･夜)

「ジャクソン・ポロック展」
11月　特別鑑賞会(昼･夜)　★☆
11月　講座(塩津学芸員)★
「アメリカの美術―ポロック以前・ポロック以降」

「全館所蔵品展（うつし、うつくし展）」
2月　特別鑑賞会(昼･夜)　☆
2月　講座(大同大学教授　佐藤達生氏)★
「ゴシックの大聖堂」

定例活動
美術館モニター　3回
所蔵作品管理　のべ14回
木村コレクション…風呂敷補修手入、ポジの名札･台帳作成
キャプションの整理
島田章三展調書作り
洗濯（軍手･晒し）
防災頭巾作成
発送　のべ3回　　受付　のべ10回
会報発行　第34号発行
ホームページ　随時更新
★中面で紹介　☆裏面で紹介

◎特別鑑賞会◎

ポロック展では、リズミカルな線と交差する色彩が躍動する作品群に魅入りました。混沌としていたものが、次第に調和のとれた美しさになってくる…。ポロック入門者の私にも何かが見えてくるような気がしました。(MIKIKO)

◎特別鑑賞会◎

「うつし、うつくし展」は所蔵作品による特別展ですが、深山学芸員の解説をお聞きし、「映、写、移」に観方を絞ることで、その美しさ・緻密さ・創造性に、新たな発見をすることができました。(喜田)

注目！日帰りバスツアー 今年も開催します！

昨年MIHOミュージアムを訪ね好評だったバス旅行。今年は4月22日に開催！滋賀県立近代美術館・佐川美術館を訪ねます。是非ご参加ください！！
（写真は昨年の様子です）

これからの企画展のご案内

魔術／美術―幻視の技術と内なる異界
4月13日(金) → 6月24日(日)

マックス･エルンスト―フィギュア×スケープ
7月13日(金) → 9月9日(日)

美しき日本の自然―風景･草花･動物
9月28日(金) → 11月25日(日)

ウィーン1903年 クリムト《黄金の騎士》をめぐる物語
12月21日(金)→2013年2月11日(月･祝)

友の会入会のご案内

友の会の詳しい活動内容を知りたい方、入会をご希望の方は、下記までお問合せ下さい。

●10階愛知県美術館受付
●友の会事務局（火･木･金･土 10:00-16:00）
052-971-5511(代) 内線347
tomonokai@aac.pref.aichi.jp

編集後記

乾燥、寒波、インフルエンザ。誰某がダウンしたとの便りのなか、マイペースで原稿をあげる人、まだまだと苦悶し続ける人。ひたひたと迫りくる年度末。師走よりも師は走らなければならない多忙な日々。今年も空中回廊は頑張ります。　（中塚）

□編集　小林 克敏／中塚 千佳／水野 愛子／大矢 真美代
高橋 文枝／平松 章子／松下 智子／宮崎 玲子／森 健次
□協力　愛知県美術館
□発行　2012年3月
愛知県美術館友の会
〒461-8525 名古屋市東区東桜一丁目13-2
愛知芸術文化センター内
TEL: 052-971-5511(代)内線347
FAX: 052-971-5617
E-mail: tomonokai@aac.pref.aichi.jp
美術館ｳｪﾌﾞｻｲﾄ: http://www-art.aac.pref.aichi.jp

Art Direction : Masaru NAKADA　Design & Layout : Aiko MIZUNO / Tomomasa NARITA